SKIP シティ国際 D シネマ映画祭 2024 レポート

国際コンペティション、国内コンペティション（長編部門・短編部門）を中心とした“若手映像クリエイターの登竜門”「SKIP シティ国際 D シネマ映画祭 2024」（主催：埼玉県、川口市、川口商工会議所ほか）は、7 月 13 日（土）に初日を迎え、国際コンペティション部門で審査委員長を務める映画監督の白石和彌氏、国内コンペティションの審査委員長を務める映画監督の横浜聡子氏をはじめとする審査員一同と、国内外から集まったコンペティション部門のノミネート監督らが出席してオープニング・セレモニーを開催した。

SKIP シティ国際 D シネマ映画祭 2024 は、本日 7 月 13 日（土）から 21 日（日）までの 9 日間、埼玉県川口市の SKIP シティを会場にしたスクリーン上映、7 月 20 日（土）から 24 日（水）までの 5 日間は特設サイトでのオンライン配信として、ハイブリッド形式で開催した。

コンペティションでは、102 の国・地域から応募のあった 1,201 作品から厳選した 24 作品を、国内初上映。

国際コンペティションには白石和彌監督が審査委員長として、国内コンペティションでは、横浜聡子監督が審査委員長を務めた。コンペティションは映画祭期間中の最終審査を経て最優秀作品賞をはじめ各賞を授与された。

特集「商業映画監督への道」では審査委員長の白石監督と横浜監督の作品上映と若手映画監督に向けて商業映画監督としての経験を話すトークイベントを開催した。

映画祭をより身近に感じられるために、名作の中からアンケートを実施し、上位となった 4 作品『ドライブ･マイ･カー』『スタンド･バイ･ミー』『ショーシャンクの空に』『トップガン マーヴェリック』を上映した。『トップガン マーヴェリック』の上映後には映画字幕翻訳者の戸田奈津子さんとのトークイベントが開催された。

SKIP シティ国際 D シネマ映画祭 2024 授賞結果一覧

《国際コンペティション部門》

最優秀作品賞（グランプリ）：『日曜日』監督：ショキール・コリコヴ｜ウズベキスタン｜英題： SUNDAY

監督賞：『連れ去り児（ご）』監督：カラン・テージパル｜ インド｜英題：Stolen

各賞受賞者と実行委員会、実行委員の皆さん

審査員特別賞：『嬉々な生活』監督：谷口慈彦｜日本｜英題：Happy life

観客賞（国際部門）：『連れ去り児（ご）』監督：カラン・テージパル｜ インド｜英題：Stolen

《国内コンペティション》

優秀作品賞（長編部門）：『折にふれて』監督：村田陽奈｜日本｜英題：The Midnight Sun

優秀作品賞（短編部門）：『はなとこと』監督：田之上裕美｜日本｜英題：Hana and Koto

観客賞（長編部門）：『雨花蓮歌』監督：朴正一｜日本｜英題：Poems of Flower Rain

観客賞（短編部門）：『立てば転ぶ』監督：細井じゅん｜日本｜英題：Stand Up and Roll

《SKIP シティアワード》：『嬉々な生活』監督：谷口慈彦｜日本｜英題：Happy life

国際コンペティション部門 受賞作品【最優秀作品賞（グランプリ）】賞金 100 万円

『日曜日』監督：ショキール・コリコヴ 2023 年 / ウズベキスタン / 97 分英題：SUNDAY / ©Yoshlik

受賞コメント：ショキール・コリコヴ監督

この映画祭で最優秀作品賞を受賞でき非常に嬉しく思っている。この映画祭のおかげで初めて日本を訪問することができ、とても嬉しい。映画は一人で作るものではなく、大勢の方、チームの力で作るものなので、私だけの賞ではなく、このチームとして受賞できたことを光栄に思う。またこの賞は、ウズベキスタンの方々の賞でもある。次作はぜひ早めに撮影して、日本でも上映できるようがんばりたい。この映画は初めての長編映画で、脚本は 2 年間かけて書き、撮影は 10 日間で行った。

■審査員コメント 白石和彌（映画監督）

ウズベキスタンの田舎の老夫婦の日常を綴っていく作品で、ほぼ中庭だけで展開していくその構成にもびっくりしたが、なんでもない日常が、これほど愛おしいと思える時間が続くこと、それがこれだけ心を打つのだと感じた作品。見ている 間、この時間が永遠に続いて欲しいと願うが、人生と同じでこの映画にも終わりがあって、その終わりの描き方も素晴らしい。大きな事件は起こらないが、中庭の小さなマクロの世界を描きながら、人間の営みがこうやって続いてきたのだろうなということを感じさせる。ユーモアがありながら、ときに残酷で、現代社会のメッセージが込められた、美しく心洗われるスケールの大きな映画。副賞の賞金があれば、次作への力にもなるだろうと思い、また作品を作って日本に持ってくることができるよう、審査員一同心から応援している。

大野 元裕(実行委員会会長/埼玉県知事)

奥ノ木 信夫 (実行委員会副会長/川口市長)

八木 信忠 (映画祭総合プロデューサー)

土川 勉 (映画祭ディレクター)

【監督賞】賞金 50 万円『連れ去り児(ご)』
監督:カラン・テージパル 2023 年 / インド / 94 分 英題:Stolen / ©Jungle Book Content Studio Pvt. Ltd.
受賞コメント カラン・テージパル監督

この映画の着想自体は遡ること 10 年前で、その後企画が始まったのは 2019 年なので、今日という日を迎えるまでに足かけ 5 年も経っています。どの映画監督にとってもやはり初の長編作を撮れるということ自体が素晴らしいギフトです。その上、このような賞をいただけて本当に嬉しい気持ちで一杯です。

■審査員コメント 荒木美也子(アスミック・エース株式会社 社長特命事項担当・プロデューサー)

実を言うと、この作品が観客賞も取って W 受賞になるというのは、ついさきほど知りました。驚きであると同時に、当然でもあるかなとも思いました。これだけ重厚なテーマを一人でも多くの方に届けるには、監督も相当苦心されたことかと思いますが、エンターテイメントでスリリングな要素を掛け合わせた傑作でした。正直、長編第一作目とは思えないような素晴らしい演出で、あのシーンはどう撮ったんだろうか等、審査員一同で話題になりました。アクションなどの派手さだけではなく、主要登場人物のみならず周囲も含めた人物描写の繊細さや、社会が抱えている色々な背景が伝わってくる素晴らしい演出でした。この映画祭に応募されてきた作品は、監督と脚本を一人でされている方が多かったですが、本作のカラン監督は脚本家や多くのスタッフと力を合わせて作られました。監督は観客賞のコメントで、スタッフのみなさんの力で〜とおっしゃっていましたが、オーケストラでいうところの指揮者として、卓越した力量を発揮していたと思います。

国際コンペティション部門 受賞作品【審査員特別賞】賞金 30 万円
『嬉々な生活』監督:谷口慈彦 2024 年 / 日本 / 91 分 英題:Happy life / ©belly roll film
受賞コメント谷口慈彦監督

この作品は 1 年前くらいに撮ったが、どういうふうに受け入れられるのか、どういう印象を持ってもらえるのかわからないまま、初期衝動で突っ走って制作し、完成まで持っていった。今回初めて上映し、貴重な賞とご意見をいただいて、作ってよかったという想いを噛み締めている。出演者の子供たちも、これから未来へ羽ばたいていく世代なので、この賞がその子たちの励みにもなればと思う。

■審査員コメント 武井みゆき(配給会社ムヴィオラ代表)

実はこんなにコンペティションの作品を見て楽しめたのは初めてで、もっと賞があればよかったのに、というのが一番強い感想。こういう素晴らしい作品が集まったというのは、これまで SKIP シティでやってきたことの積み重ねであり、一次審査員の方が真剣に映画をご覧になって選んでくれたことが大きな力だったと思う。賞が 3 つしかないので、受賞しなかった作品の方もらっしゃるが、優劣を決めるのはとても難しいので、たまたま今回揃った 3 人の審査員それぞれの背景、生きてきたこと、学んできたことが反映されているものなので、受賞したからこれが一番優れているとかそういうものではな く、お客様それぞれに今回の最優秀作品賞というのがあると思う。
この作品は、他の賞もとるかもしれないと思ったが、何もあげないというのもつまらない、何か形に残したい、ということでこの賞が決まった。配給会社の人間としては、受賞作を決める際、日本全国のたくさんの人に見せたいかどうかが大きなポイント。映画祭という特別な場所だけでなく、北は北海道から南は沖縄まで、色々な方達に見ていただける機会を作 りたいという映画が、今回選んだ作品だった。『嬉々な生活』は、キャストの素晴らしさはもちろん、主人公の周りにいる大人の描き方も素晴らしい。こういう時代、子どもをまもらなくてはいけない大人も傷ついている、弱いのだということを監督が受け止めているからこそ、この映画が冷たくならない、そして観客が映画館を出るとき、少し強くなって出られるような気がする。また今年見た映画の中で一番感動したラストシーンは、自分で走り出したくなるくらいの気持ちになった。そんな想いをさせてくれた谷口監督に感謝しかない。

【観客賞】『連れ去り児(ご)』監督:カラン・テージパル 2023 年 / インド / 94 分
英題:Stolen /©Jungle Book Content Studio Pvt. Ltd.
受賞コメント:カラン・テージパル監督
驚きました。個人的なテーマを描いたもので、土地に根づいた非常にローカルなアイディアがこのように文化圏を超えて日本の方々に響いたことは、わたしにとって非常に意義深いことです。長年ずっと背負って

きたプロジェクトなので、今回の受賞という瞬間は大変なカタルシスを感じます。映画は一人で作られるものではなく、スタッフの皆さんにとても協力していただきました。この賞は、もはやこの映画に関わった皆さんのための賞だと思っています。

国内コンペティション部門 受賞作品【優秀作品賞（長編部門）】賞金 30 万円

『折にふれて』村田陽奈監督

トロフィーがとても重く、この重さを噛み締めながらここに立たせていただいている。

この作品は、大学の卒業制作としてみんなで撮った作品。やれることを全部やり切って卒業しようという気持ちで作った作品が、映画祭という場で見ていただけて、賞までいただけたことを光栄に思う。大学の教授で俳優でもある鈴木卓爾さんが「この映画はみんなの場になる作品だね」と言って下さったのが心に残っている。今後も、この映画がみんなの場に なって心に留めてもらえるような機会を作れるよう、作品とともに歩んで行きたい。

■審査員コメント 川瀬陽太（俳優）

よくいう陳腐な言葉ですが、受賞を逃した方々も「選ばれなかった」ということではない。かけがえのない瞬間がどれだけ映っているかなど、非常に主観的なで感覚で話し合った結果、この作品になった。『折にふれて』は、そういう「かけがえのない瞬間」が映っていたと思う。一本目の作品といのは、当たり前だが 2 度と撮れない、そういう光のようなものが映っていた。

【優秀作品賞（短編部門）】賞金 20 万円

『はなとこと』監督：田之上裕美

2024 年 / 日本 / 42 分　英題：Hana and Koto / © はなとこと / 田之上裕美

受賞コメント田之上裕美監督

自分の至らないところ等をたくさん考えていたので、受賞できるとは想像していませんでした。自分の家族のことを考えたり、自分の内向きなところをどうにかしたいと思って、この作品を作りました。仕事もある中、キャストやスタッフのみんなが自分の時間を割いて参加してくれて、しかも初めてのロケ撮影や泊りがけの撮影で、自分も監督の仕方がわからない中で、みんな一緒に考えてくれて、この作品を作って本当に良かったと思います。みなさんには感謝の気持ちしかありません。

■審査員コメント メイスク･タウリシア（映画プロデューサー）

この作品は、非常に若い時にしか経験できないような自由さやナイーブさ、その責任が伴わない貴重な年月を、光をたっぷり当てて明るく捉え、そこで人生という重たい荷物を背負う時期がやってくるという情景を描いています。大人の階段を上るということで物事を様々な角度から認識するようになり、責任というものを知ることとなるわけです。主人公は、ある重大な決断を下しますが、それが正しいのか間違っているのか彼女の知るところではありませんし、観る側がジャッジするものでもありません。大事なのは自分で自分のことを決めていくことができるようになったという点です。我々審査員は非常に貴重なものを見ている感じがしました。祝福の言葉を送りたいと思います。

国内コンペティション部門 受賞作品【観客賞（長編部門）】

『雨花蓮歌』監督：朴正一　2024 年 / 日本 / 79 分　英題：Poems of Flower Rain / ©Jengilpark

受賞コメント朴正一監督

前回も短編も出品して観客賞をいただき、投票していただいた方に感謝したい。前回『ムイトプラゼール』を撮った時に一つわかってしまったことがあり、それは、自分は才能がないのだなということ。その時、今回のように優れたスタッフと優れたキャストを集めれば、映画は素晴らしくなるのだとわかり、今回も同じ手法で作ったところ賞をいただけたので、スタッフ、キャストの方々に感謝している。

【観客賞（短編部門）】

『立てば転ぶ』監督：細井じゅん 2024 年 / 日本 / 48 分　英題：Stand Up and Roll / ©JUN HOSOI

受賞コメント細井じゅん監督

ダラダラと喋ってるだけで中身のない作品ですが、個人的で繊細なところが詰まっている作品だと思っていて、そういうところが伝わっていれば幸いです。これからも頑張ります。

SKIP シティアワード 受賞作品

『嬉々な生活』監督：谷口慈彦　2024 年 / 日本 / 91 分 / 英題：Happy life / ©belly roll film

受賞コメント谷口慈彦監督

映画の上映に際して様々な意見を聞かせていただき、他のいろいろな作品を観たりと、とても充実した一週間を過ごさせていただきました。その上でこういった素晴らしい賞を頂戴し、さらに横浜監督からもコメントをいただきとても興奮しています。この賞に恥じないよう、これから良い映画を作っていきたいと思っています。

■審査員コメント 横浜聡子俳優（日本）

短編部門と長編部門では審査員三人の意見が割れました。が、この賞に関しては満場一致でした。多分、この映画が世の中に必要であると、それぞれが確信したんだろうなと勝手に思いました。すごく上手な映画作りをされる監督です。一つのシーンの結論を描くのに、直線距離ではなく可能な限りの遠回りをしながら、色々なものを取り入れながら最終的に描きたいことを描く方なんだなと。「ひとつのことを描くのに 4 つの面白いことを取り込みなさい」という有名な監督の言葉を思い出しました。遠回りしているからこそ、自然で無理のない構成の連続であることに大変驚きましたし、わたし自身も勉強になりました。映画をつくっているとラストシーンをどうしようか

ということが一つの大きな壁になります。この映画のラストも決して派手な出来事が起こるわけではないんですが、すごく斬新で、わたし自身あまり観たことがないものでした。ただ斬新なだけでなく、きちんと人に寄り添っているので、観た人の心を打つ感動がありました。さらに主人公の西口千百合さんの佇まいが目を見張る素晴らしさで、まだ観ていない人がいたら彼女の存在を是非確認してください。

※ SKIP シティアワードは、国際コンペティション・国内コンペティションを通じた全ての日本作品の中から、今後の長編映画制作に可能性を感じる監督に対して授与する賞です。受賞者の次回企画に対し、SKIP シティ彩の国ビジュアルプラザの映像制作支援施設・設備の一定期間の利用を提供します。

《総評》国際コンペティション審査委員長 白石和彌（映画監督）

審査員の方々も再三言っていますが、受賞の有無に差はないと思っています。参加された方々にとっては、この映画祭で受けた刺激が今後活きてくると思いますし、どの作品も素晴らしく、我々も毎日胸をワクワクさせながら拝見しました。

『マリア・モンテッソーリ』（レア・トドロフ監督）

受賞に至らずとも本当に印象に残った作品が多かったです。『マリア・モンテッソーリ』（レア・トドロフ監督）は、美しくてパワフル。彼女の生き方に圧倒され、かつそれを見ているお前は一体どういう生き方をするんだと問い掛けられているような作品で、まさに生き方に多様性が求められる現代に向けた映画になっていました。『子を生すこと』（ジュディス・ボイト）は、人生はなかなか思った通りにはいかないことを示唆していますが、愛があれば色々な困難を乗り越えていけるということを私たちに投げかけてくれました。過去の戦争や紛争を題材にした作品も印象的で、残念ながら過去の教訓に学ぶことができていない現状ですが、たとえ過去の戦争を描いていても、現代の紛争を生きる人々にメッセージを届けるという重要な役割が映画にあることを示してくれました。自分自身、これから何をテーマにしていくかということを問い掛けながら『マスターゲーム』（バルナバーシュ・トート監督）と『Before It Ends』（アンダース・ウォルター監督）を拝見しました。最後に『別れ』（ハサン・デミルタシュ監督）が個人的に最も印象に残りました。監督の自伝的作品で、移住しなければならなくなったトルコのクルド人を描いた作品です。ご存じの通り、この映画祭の開催地である川口市ではクルド人の問題というのが根強く、ネットを見ればクルド人に対するヘイトスピーチなんかが溢れかえっています。映画祭のＱ＆Ａセッションの　際、監督がおっしゃっていたのは「伝書鳩になってクルド人の生活や文化を世界中の人に届けることが自分の役割だ」と言っていました。全ての始まりになるのは相互理解だと思います。そういう意味では映画の役割も非常に大きくて、監督の気持ちに心を打たれました。また、こういった作品を川口市で行われる映画祭の中で選定するという意義を、静かなメッセージとして受け取りました。敬意を表したいと思います。今年は大雨があったりなかなか動員が厳しいところもありましたが、もっと若いお客さんに観てもらって、会場自体が熱気で溢れるくらいの映画祭に、これから育っていってほしいなと切に願います。

《総評》国内コンペティション審査委員長 横浜聡子（映画監督）

全ての国内コンペティション作品をスクリーンで観させていただき、審査員であると同時に、一人の観客として、ワクワクしながら楽しみながら観させていただいた。川瀬さん、メイスクさんと審査員をやらせていただいた時間もとても大切な時間で、本当にいろんな話をして、２時間くらいかかったが、とても貴重な時間だった。

今の若い方が作る映画は、機材も発達しているし、技術なクオリティも上がっているし、小さい頃から動画に親しんでいる世代の方が多いので、技術的なクオリティが高い作品が多いのかなと思って見たが、実際には、技術的なクオリティに寄りかかって、そればかりが際立ってしまう作品ではなく、皆さんの作品は同じよう映画がひとつもなく、自分なりの方法で世界に触れようとしている、真剣に触れようとしている姿勢が、技術的なもの云々よりも、私の胸にダイレクトに飛び込んできて、一番嬉しかったと同時に、ほっとした所でもある。

『チューリップちゃん』渡辺咲樹氏監督

渡辺監督の『チューリップちゃん』はいかにも可愛らしくて個性的な絵と、声優の脱両的な芝居がそこに繰り広げられていて、一体どんな映画なんだろうとドキドキしたのだが、人間は成長しなくてはいけない、変化しなくてはいけないという、ある種の強迫観念に追い詰められて取り残されたしまう一人の女性のすごくシリアスなテーマが描かれていた。そういった女性が、ある瞬間に、強迫観念といったものを大事にする世の中の論理が覆されて、最終的に主人公がハッピーエンドを迎えるという思いがけない展開にびっくりして心を打たれた。張監督の『相談』は、手持ちのカメラで、ワンカットでシーンを作っていくという手法はそれほど珍しいわけではないが、カメラと被写体の距離感がずっと的確に保たれていて、次に何が起こるかわからないという緊張感が常に映画の中に張り巡らされていた。西岡徳馬さんというベテラン俳優に引っ張られるのではなく、作り手の世界に西岡さんを引き寄せて映画を成立させていたところが素晴らしい。畔柳監督の『松坂さん』は、アキ・カウリスマキ監督の映画を思い出した。独特な佇まい、表情が豊かだとか、抑揚のある感情的な喋り方とかではなく、淡々とした芝居で抽象化された表現の中にも、20 代の彼らの等身大の切実さというものが滲み出ていて、彼らの孤独が、私自身の孤独のように、自分ごととして感じることができた。映画の中に、脚本や手紙など色々なアイテムが詰め込まれているが、一つ一つが物語にとって必要不可欠なものとしてつかわれていた。